



## 象印マホービン株式会社



### 2021年6月のフルクラウド化を目指し オンプレミス環境の業務システムの約4割をAWSに移行 TCOを30%以上削減し、新たなIT施策を実施できる環境を実現

#### ご利用中の主なサービス

- Amazon EC2
- Amazon RDS
- Amazon S3
- Amazon Route 53
- Amazon CloudWatch
- AWS Direct Connect

#### ビジネスの課題

- 物理サーバーの保守サポート切れ対応
- 長期的な視点でのコスト軽減
- 新規システムのスピーディーな構築

#### AWSを選択した理由

- 新サービスが提供されるメニューの多様さ
- 定期的な値下げで顧客に還元する姿勢
- 採用実績の多さ

#### AWS導入後の効果と今後の展開

- TCOを従来の約3分の2まで削減
- 新たなIT施策の実施が実現
- リードタイムの短縮による新規システムの速やかな立ち上げ
- サーバー台数やリソースを簡単かつ素早く変更が可能
- コストをかけずに冗長構成を最適化
- 2021年までにすべてのオンプレミス環境のクラウド化を完了
- サーバーレスアーキテクチャーの活用やAmazon AppStreamを使ったアプリケーションのデスクトップ配信などAWSの新規サービスの活用を検討

『暮らしを創る』を企業理念に、炊飯ジャーなどの調理家電や、ステンレスボトルなどのリビング用品、空気清浄機などの生活家電の製造・販売を手がける象印マホービン株式会社。2018年より社内システムのクラウド化に舵を切り、2021年6月のフルクラウド化を目指し1次基盤として約4割のオンプレミスシステムをAWSに移行。その結果、TCOを30%以上削減に成功。得られた予算で新たなIT施策を進めています。インフラ調達のリードタイムも短くなり、業務部門のリクエストに応じて新たなサービスをクイックに立ち上げることが可能になりました。

#### メニューの多様さと定期的な値下げを踏まえてAWSを採用

1918年に大阪市西区で魔法瓶メーカーとして創業した象印マホービン。現在は大阪市北区に本社を置き、『日常生活発想』をスローガンに調理家電、リビング、生活家電の3つを柱に事業を展開しています。近年話題のプラスチックごみ問題に対しては、2006年よりステンレスボトルを通してサステナブルな生活を呼びかける『マイボトルキャンペーン』を展開しています。

事業を支えるシステムは長年、自前で購入した物理サーバー上に仮想サーバーを構築したオンプレミス環境で運用してきました。しかし、全システムの約4割に相当する物理サーバーが一斉に保守期限を迎えることから、第1次基盤としてリプレースを検討。オンプレミスの継続とクラウドへの移行の2つを議論する中から、6～7年先の長期的なコスト削減を見据えてクラウドを選択し、複数のサービスの中からAWSを採用しました。「コストを試算した結果、オンプレミスより安価で、品質や機能面でも遜色なかったことからクラウド化を判断しました。AWSを選んだ理由は、次々と新サービスが提供されるメニューの多様さと、定期的な値下げで顧客に還元する姿勢です」と語るのは経営企画部 システムグループ長の松浦潤氏です。

同氏は前職でもAWSを利用していた経験があり、そのメリットを肌で感じていたこともポイントになりました。社内や経営層

からは、システムをクラウド化することに対する不安の声はなく、スムーズにAWSへの移行が決まったといいます。

「当社は新しいことへのチャレンジに関して積極的に支援、応援する社風があり、経営層も背中を押してくれました。AWSは知名度も高く、すでに金融機関などで採用されている実績があることから、セキュリティや機能面で不安が少ないことも安心感につながったと思います」(松浦氏)

#### システム単位でサーバーを立ち上げ段階的に移行

AWSへの移行プロジェクトは2018年1月にスタート。同年11月には1次基盤の移行を終えました。移行したシステムは、人事、会計、Active Directoryなどの業務系システムが中心です。移行とは別に、外部の委託会社のAWS環境上で稼働していた社内ホームページや消耗品販売サイトも今回構築したAWS環境に集約したほか、プロジェクト中に発生した象印製品の愛用者を対象とした『ZOJIRUSHI オーナーサービス』のサイトや、生産ラインの進捗管理システムなどの新規サービスもAWS上に構築しました。

システムの移行は、大阪市に拠点を置く株式会社ターン・アンド・フロンティアの支援を受けながら作業を実施。AWS環境の設計、構築、移行を担当した経営企画部 システムグループの杉森圭太氏は「AWSのメリットは、移行するシステム単位でインス



象印マホービン株式会社  
経営企画部 システムグループ長  
松浦 潤 氏



象印マホービン株式会社  
経営企画部 システムグループ  
サブマネージャー  
杉森 圭太 氏

## カスタマープロフィール

### 象印マホービン株式会社

- 創業年月日：1918年5月10日
- 設立年月日：1948年12月29日
- 資本金：40億2,295万円
- 従業員数(連結)：1,357名(2019年11月20日現在)
- 事業内容：調理家電製品、生活家電製品、リビング製品などの製造・販売およびこれに付随する事業



## TURN AND FRONTIER

### APN アドバンスド コンサルティング パートナー 株式会社ターン・アンド・フロンティア

AWS 東京リージョン開設に先行して、2008年からAWSの導入支援と運用サポートを開始。導入から運用支援までクラウド活用を包括的にサポートする cloud link を展開し、2014年には関西に本社を置く企業としては初の APN アドバンスド コンサルティング パートナーに認定される。Sier からエンドユーザーまで関西を中心に全国で400社以上のサポート実績を有する APN パートナー。

「6～7年で試算したTCOで3分の2で維持ができており、かつ残りの予算で新たなIT施策が実施できていることから、計画通りの効果が出ていると見えています」

象印マホービン株式会社 経営企画部 システムグループ長 松浦 潤 氏

タンスを設計・構築し、移行できることにあります。そのため、プロジェクト期間は全体で11ヶ月かかっているものの、アプリケーションベンダーとスケジュールを調整しながら、システム単位で段階的に移行しているので、作業日数自体はわずかで済みました」と話します。

### 安価に試せるAWSのメリットを活かし 新たに5つのサービスをスタート

1次基盤のクラウド環境は、Amazon EC2とAmazon RDSで構成し、データベースはアプリケーションに応じてOracleとMySQLを利用しています。現在、Amazon EC2上では約50のインスタンスがあり、移行から約1年が経った現在、安定稼働を続けています。

1次基盤はオンプレミス環境全体の約4割を移行しました。「現在のところ、前年の3分の2のコストで維持ができており、かつ残りの予算で新たなIT施策が実施できていると見えています」と松浦氏は語ります。

IT部門にとっては、AWSによってコストがサーバーのリソース容量単位となり、環境を用意するまでのリードタイムがほとんどなくなったことから、新たなサービスに即座にチャレンジできるようになった効果は大きいといえます。

「サービスによっては数時間で新しいサーバーを立てて、数百円程度で試してみることができると、アプリケーション開発側からの要求にも即座に答えて、本番と同じ環境で検証してもらうことができます。今回のプロジェクトでも、こうした特性を活かした結果、オーナーサービスサイトなど5つのサービスを新たにスタートさせることができました」(杉森氏)

IT部門では現在もAWSから随時リリースされる新サービスの情報を積極的に収集し、実際の業務に使うことができないか、コストの軽減に貢献できないかなどの意識改革が進みました。

日々の運用面でもサーバーの台数やリソ

スを簡単かつ素早く変更できることや、サーバー構築時に見積もりや計画を立てる必要がないこと、アベイラビリティゾーン(AZ)を使うことでコストをかけずに冗長構成が最適化できることなどにメリットを感じています。

AWS環境の監視・運用は、ターン・アンド・フロンティアの運用サービス『cloud link』を利用し、24時間365日のサーバー監視対応とAWSインフラに関する設定、バックアップ、請求代行を委託しています。松浦氏は「ターン・アンド・フロンティアは、私たちの話に親身になって耳を傾け、何がベストかを考えて最適な提案をしてくれました。日々の運用でも柔軟に対応する姿勢を感じています」と評価しています。

### 残りのオンプレミス環境を 2021年に向けてすべてAWSに移行

1次基盤のAWS化を終えた同社は、追加で2021年6月にOracle Exadata上に稼働している同社の基幹システムを含むアプリケーションのAWSへの移行を完了し、ほぼすべてのオンプレミス環境のクラウド化を完了させる予定です。

「2次基盤は販売、受発注、出荷、WMSなどの基幹系システムや、従業員が利用する情報系システムが中心です。1次基盤以上に可用性が求められ、高性能のサーバーやデータベースを必要とするシステムも多いことから、慎重に検討していきます。とはいえ、今後もクラウドファーストの方針でAWSの利用を前提に考えていきます」(松浦氏)

AWSのサービスについては、多くの製品・サービスを理解・検証しながら今後のIT施策にも活用していく考えです。杉森氏は「サーバーレスアーキテクチャの活用やAmazon AppStreamを使ったアプリケーションのデスクトップ配信、コンタクトセンターのAmazon ConnectとAmazon CloudWatchを使ったAWS環境の監視の自動化などを検討してみたいと思います」と展望を語ります。



アマゾン ウェブ サービス ジャパン株式会社

〒141-0021 東京都品川区上大崎3-1-1 目黒セントラルスクエア <https://aws.amazon.com/jp/>

Copyright © 2020, Amazon Web Services, Inc. or its affiliates. All rights reserved.